

小説

〔自由作品〕

奨励賞

極楽坂物語

白山町 坂ノ下 栄 仙

福良湊（ふくらみなと）は、古代より近世・大正時代にかけて帆船時代の日本海航路の避難港であり、風待ち港として利用されて来た。

その福良湊は、能登半島の付け根に位置し、昔から風当りが小さく、雪が割合と降らない地でもあった。崖が海にせり出し、港は大間と水の間と、二つの湾から成り立っている。大間は懐が深く水深もあり、古代船や北前船が逗留するのに適していた。昭和に入ると、底引船の基地として、漁港の役割も果たしていた。

それゆえに北陸第二の大湊とも言われていた。（ちなみに第一は福井の敦賀湊である）

江戸時代、北前船が日本海を往来する頃には、頻繁に入港する船も多く、正保年間には、四千五百石積の船が百隻ほど入ったと

も言われている。加賀藩資料を紐解くと、北前船は、日本海沿岸の諸藩の年貢米や塩を大阪まで運ぶのに利用された。また北前船の船主は、北海道の海産物を日本海側の湊湊で交易し、地方の特産物などを売り買っていたのである。

当時の福良湊は、福良泊まりと呼ばれ二つの湊には、年中、モジリ姿の船乗りで賑わっていた。そのころの船乗りは羽振りも良かった。が、板子一枚下は地獄と言われていた時代でもある。

日本海を航路とする北前船には、時化による遭難事故が付きものであり、溺死する水夫も少なくなかった。また病死する水主もいた。当時、死人を生国しょうこくまで船で運ぶことは、忌み嫌うところがあった。

それに当時、福良村には、他国から流れ来た女たちも少なくは

なかつた。生国や名前も定かではない遊女たちの中には、病気で命を落とすものも少なくは無かつた。

そうした人々は、金毘羅崎を五百m南に下つた松林の中に埋葬された。その地は『極楽坂』と、村人と呼ばれ、船人や他国の人たちの埋葬の地となつていた。

福良村には、福専寺と禪正寺がある。それぞれの寺の江戸時代の過去帳によると、前寺には船乗り百四十三名以上、後寺には船乗り二百五十名以上の死亡者が記載されている。それ以上に、記載されていない船乗りや遊女や、他国の名もない人々も極楽坂に眠っている、とのことである。

この極楽坂は、断崖の松林の中にある。右手に福良の二つの湊の入り口を見下ろせた。遠くには、能登富士が裾野を広げ、千浦村の高岩岬が見える風光明媚なところである。そこに眠る彼らは、波の音を読経代わりに聴いているのかもしれない。

高坂知恵は大学で民俗学を専攻し、風土と昔話の関係について研究している。そこで今、志賀町の風土にまつわる伝承話を収集し、その特色や成り立ちなどを調べている。

そんな理由から、とりわけ地元の話には関心があり、小さい時から『極楽坂』や『腰巻地蔵』の言葉は耳にしていた。そこでゼミのテーマに『極楽坂』や『腰巻地蔵』を選んだ。

三回生の夏休み、付き合っている金田伊知郎を伴い福浦に帰郷していた。

知恵の祖母は、知恵が幼い時分から福良の伝承話をたくさんしてくれた。

知恵は「狐の嫁とり」、「年老いた古堂の銀狐」、「寺男に誓いを立てる老狐」、「巖門の化け狐」、「三角山の狐」、「化けるのが下手な子狐」など狐に係わる話や、ムジナの話などを聞いたことがあつ

た。どれも狐やムジナに、村人が騙された話であつた。

そんなこともあり、一昨年には祖母から極楽坂に係わる悲恋物語の話聞いていた。

そこで知恵は、この夏、伊知郎を誘つて、極楽坂に付いて本格的に調べようと思つたのである。

極楽坂の悲恋物語は、北前船が盛んに福良湊に出入りし、福良村が賑わつていた江戸後期の話である。そのころ、北前船が持ち込む海産物の昆布、ニシン、タラなどの海産物を扱う佐渡屋や加賀屋、直宮屋、木谷屋、高島屋などの船宿や廻船問屋が手広く儲けていた。

もともと福良は農耕地が狭いため、石高が少なく農作業で生計を立てる人はあまりいなくなつた。よつて船乗り相手に商いをする人が多く、様々な商売が生まれた。酒屋、飲み屋、飯屋、鍛冶屋、風呂屋、餅屋、魚屋、八百屋、豆腐屋などの店が集まつていた。船宿は多い時には、二十軒ほどあつた。文久二年（一八六二年）の人口の推移を見ると、戸数百九十四、男三百十七名、女三百七十九名になつている。女の数が多いのは、船宿や呑み屋、遊郭で働く人が増加したゆえんであろう。

そして、どこかの湊でも繁盛する遊郭は、福良の日和山にもあつた。北前船が頻繁に入ると、湊の坂を上つた日和田地区には、女たちを取りこむ遊郭が軒を連ねるようになった。船乗りを相手にする遊女たちのうわさが広まり、いつしか福良村は、ゲンジヨ（遊女）の村として、近郷近在で名を馳せていた。すると他村の男衆も福良の遊郭に足を向けるようになった。

こうして福良村は北前船で潤い、いろいろな人々が入り込み、人口は増えて行つた。

ある年から、北海道の松前の千寿丸と言う北前船が入るようになった。

千寿丸は大阪までの航海の中、北海道のニシンや昆布などを、沿岸の湊湊に下ろし、地方の産物と交易していた。松前への帰りは、大阪や瀬戸内などの産物を、湊湊で売り買いしながら帰路に就くのであった。

その船に貴平と言う若い水夫が乗っていた。水夫になって、まだ二年しかたっていない十七歳の船乗りである。船乗りと言っても、船の中では一番の下っ端で、先輩水夫たちにこき使われていた。二、三年は、下働きで主に雑用や炊事当番をやらされていた。

それでも労をいとわぬところが、船頭の千寿郎には、可愛がられていたのである。

貴平は十八になり、漸く水夫の仕事にも慣れてきた。躰も一人前に筋肉が盛り上がり、引き締まった手足、厚い胸板、潮風に鍛えられた顔からほとぼしる精気。

そんな貴平を見て、そろそろ筆おろしをしてよい歳だ。と船頭の千寿郎が言った。そして日和山の遊郭に貴平は、連れてこられたのである。

そこで初めて貴平は、女の肌の温かさを知ったのである。

貴平の相手をしてくれたのは、自分の母様みたいな年嵩の遊女であった。その遊女は、豊満な体躯をした優しい顔立ちの女性だった。はなやぎがあり、貴平のような若僧でも粗末に扱わない女性だった。貴平は初めての事でもあり、どうしていいかわからなかったが、トキという遊女は、優しく労わるように導いてくれた。初めての体験は夢心地の境地に達したたのである。それにトキの躰から発散する汗が、貴平の脳裏をくらくらさせた。

次の年の夏にも、貴平が乗った北前船が福良湊に入った。そのころになると貴平は、一人前の男に成長し、船乗りのほとんどの仕事をやりこなすようになっていた。また湊湊の遊郭にも足しげく通うことも覚え、血気盛んな青年となった。先は、船持ち船頭

を夢見ていた。

日和山の遊郭・寿屋には、二年前に近郷の村から奉公に一人の少女が来ていた。歳の頃なら十五歳前後、まだあどけなさが残る色の浅黒い子であった。名前は木花と言ひ、家の貧しさから八里も離れた村から売られて来たのである。木花の家は、祖父母や妹弟が五人、両親の大家族だった。木花は口減らしと、借金のために、その遊郭に売られて来たのであった。

躰を売らないという話で来たが、二年間の下働きをするうちに、遊郭の水にも慣れ、牛蒡が磨かれるようにきれいになったのである。

家主は、そこに眼をつけ、木花に客を取るように借金をたてにとり迫るのであった。

そのころ、父に払った借金に利子がついて倍になっていた。木花は泣く泣く、身を売るはめとなった。が、初めての客は貴平であったことが唯一の救いでもあった。

貴平は震えながら躰を任す木花を優しく、花びらを散らさないように包み込んだ。

その時季、貴平の船は、時化で何日も停泊していた。その間、毎日、貴平は木花の所に通った。次第に木花は、貴平の心根に心を許すようになった。もちろん、貴平も木花の無垢の心持に惚れてしまったのである。が、船が出れば別れとなる。二人の心に、切なさが増すばかりであった。

貴平は木花のことを、一時も忘れることはなかった。航海中、白い波を見ても、カモメの声を聞いても木花のことを思い出すのであった。木花への愛の深さが、他の寄港地の遊郭に足を向けさせることをしなかった。

木花も貴平のことが忘れられず、一日でも早く貴平の船が無事に入ることを、金毘羅様や極楽坂の腰巻地藏様に祈った。年に二

回の逢瀬だけでは、寂しさが募るばかりであった。

そんな木花の気持ちと裏腹に、木花は次第に遊郭一の遊女となり、派手ではないが清楚な顔だちに色香が増すばかりとなった。

貴平が木花と知り合つて三年目の夏、貴平はため込んでいた全財産五十兩をはたいて、木花を身請けしたのである。

木花は遊女に落ちた身であつたが、心は穢れることもなく貴平一筋であつた。そんな木花を貴平は、一生、大事にすると約束をし、自分の故郷松前に連れて行くことにしたのである。

当時、女子を船に乗せると、海神様が焼きもちを焼くと言われ、船乗りたちは女子を乗せることをいやがった。そこで貴平は木花を男に仕立て、船に乗せてもらい、松前に連れて行くこととしたのである。

「おまえは、俺の従弟だ。いいな。決して口を開くな」

木花は頷き、貴平の言う通りに船に乗った。木花は野良着を纏い、おしになつた。

何とか、うまく船に乗せることができたが、沖に出て半刻（一時間）もすると、突風が吹き出し、海が荒れだした。船は波と風に翻弄され、帆柱がおれ、水夫たちは荒海に投げ出された。

貴平と木花は、とつさに、離ればなれにならないように縄で腰を縛り合つた。荒海に放り出された二人は、必死に泳ぎ、繋がれた縄で離ればなれになることはなかつた。荒れ狂う海の中で、漸く一片の板にしがみ付いた二人。

貴平は木花を励まし続けた。木花も気丈に波を被りながら板にしがみ付いていたが、次第に力尽きそうになり、板辺から手が、指が離れそうになる。

「貴平、縄を切つて、二人とも死んでしまう。生きて、わたしに分まで」

「切らない。死ぬなら一緒だ。あの世で共に暮らそう」

と言つてゐる矢先に、木花の指が一本ずつ板から離れ、海中に吸い込まれて行つた。貴平は足をばたつかせ、必死に木花の縄を引つ張る。が、追い被さる波に息が続かず、貴平もまた暗い海の中に消え行つた。

波が収まり秋の長閑な風が吹く頃に、金毘羅山の海辺に貴平と木花の亡骸が、縄に繋がれたまま、波に押し上げられ岩場に横たわつてゐた。木花の髪は乱れ、着物ははだけ、肌は青ざめていた。貴平は禿だけとなり、浅黒い身体には、ところどころ打撲の跡があつた。それでも二人は、安らかな顔をしてゐた。

二人をよく知る村人や遊郭の人々が、二人を憐れんで、極楽坂に埋葬したのであつた。

それから貴平と木花を乗せた船が遭難したころになると、極楽坂に幽霊が出るという噂が流れた。それも月がきれいな晩や、霧が立ち込める朝などに、見た人は、貴平と木花ではないかと言ふのであつた。そんな話が代々、知恵の村に伝わつてゐた。が、今では誰も信じる人はいなくなつたし、確かめようとする人もいなかった。

知恵は貴平と木花の話を、大学に入り二年目の夏に祖母から聞いた。

それで三回生になつた今年の夏に、知恵は、貴平と木花の幽霊を見たいと思ひ、伊知郎と二人で幽霊の実態を確かめようとしたのである。

知恵と伊知郎は、お盆の月のきれいな日に極楽坂に行くことにした。

知恵は小さい時から昔話に出て来る妖怪に興味津々であつた。『葛飾北斎の妖怪百景』などに出て来る妖怪や幽霊や亡霊を見たいと、事あるごとに思つてゐる。が、一度も見たことがない。

伊知郎は大学で、古代史を学んでゐる。

歴史は事実に基づいた想像の産物であるという、ゼミの先生である袴先生かみしもの定義を信じてやまない学生であった。

今、彼は古代の航海術と其の軌跡を研究している。そんなことから、古代に勃海船が寄港した知恵の故郷・能登の福良湊を訪ねようと思ったのである。

「伊知郎、私、わくわくする。本当に貴平と木花が出たらどうしよう」

知恵は怖い物見たさで、昨夜から眠れない夜を過ごしていた。

「知恵、幽霊とは、亡霊とは何か?……」

と伊知郎が言う前に、知恵は口を挟んだ。

「死んだ人の魂よね。死んだ人が成仏できないで、この世に姿を現すもの! それに貴平と木花の魂が懐かしんで、出て来るかもしれないし」

「まあ、二人の魂が未練か、懐古か。どちらにしても現れるといいね。ありえないことが起きることは、世界には、多々あるからね!」

「百年以上も経っているし、条件次第だね」

二人は極楽坂へ行って来た帰り、金毘羅岬に立った。水平線に夏の陽ざしが沈んでいく。熟し柿のような夕日がすつぽりと水平線の中に吸い込まれていくと、紺碧の空に一つの星が煌めく。次第に大崎の岩場が漆黒に溶け込むころまで、穏やかな日本海を眺めていた。

「晩御飯を食べ、夜中、極楽坂に行くぞ」

と知恵は極楽坂の方を向いて、右手の拳を挙げた。伊知郎は知恵の肩に優しく手をおく。

二人は夕食に、知恵の父が釣って来た鰯を刺身にしてみらい、焼いたメバル、小鯛の味噌汁、モズクの酢味噌和え、祖母が作ったナスの田楽などを食べ、夜中に備えた。

「あんたら、本当に出たら腰を抜かすぞ。キツネやムジナに騙されるのが落ちかもね」

知恵の母は、夕食を食べる二人に、あほらしいことを辞めとけと言う。

「まあ、若い時は、なんでも挑戦や。見えたら、今度は私も見に行くわ。冥途の土産ばなしになるわいね。あのあたり、ムジナやキツネも出るし、騙されんようにな」

祖母は、笑いながらお茶をすするのであった。

知恵と伊知郎は、十一時までに入浴を済ませた。夏とはいえ夜中は冷えるので、湯冷めしないようにいつもより厚めの長そで長ズボンの服装にした。

時計の針が午前0時を回る。知恵の父も母も、祖母も眠りの中に落ちていく。二人は物音をたてずに家を出た。

外は夏とはいえ、やや冷え冷えとするが寒くはない。空には星が瞬いていた。

日和山の金毘羅神社の横道を通る。足元は暗い。伊知郎が懐中電灯で足元を照らす。道は細く草の背丈は高く蔽おほい被さる。夏虫が盛んに鳴き叫ぶ。道の右側は崖である。その崖を過ぎると旧灯台の道に出る。蒼白く輝く月、旧灯台がうつすらと闇夜に浮かぶ。潮風が二人の頬を撫でて行く。岩場に当たる波の音が崖を駆け上がって来た。夜の海の音は、昼間の音とは違い、うら寂しく聞こえる。田之尻浜への下り口までの間に四、五基の墓が、灰色に浮かびぼやっと並んでいる。そうした墓を右手に見て二人の足音が先を急ぐ。周りの草むらからガサガサ、と音がする。ギクツとする二人であった。

「極楽坂まで、もう少し」

「そうだね。怖くはないか」

「うん、二人だから怖さ半分、見たさ半分、一人だと、嫌かな」

知恵は正直、一人では行かれないと思った。

「そうだね。ぼくだって正直、嫌だね。いくら懐中電灯を持っていても」

田之尻浜への下り坂の入り口を過ぎると、大きくうねる道を下り、上ったところに極楽坂の墓地があった。二人が暗い坂道を上ると、右手に六地藏が立っていた。六地藏は、松林の蔭になり、ややまだら模様影を落としている。崖下から、ひんやりとした潮風が吹いて来る。足もとの雑草も揺れる。またガサガサという音が聞こえた。

知恵と伊知郎は、六地藏の前で手を合わせる。知恵の口元が動く、伊知郎も静かに祈るのであった。

知恵と伊知郎は、明るいうちにこの墓地に来て、貴平と木花の墓を探した。が、どの墓も文字が風化し見極めが難しかった。それでも、お寺の過去帳から、二人の名前を探し出し、それを手がかりにして貴平と木花の墓らしい墓を見つけることができた。

その墓は、崖に面した松林の中にあつた。そのそばに黒松が、重なるように二本並んで生えていた。

貴平と木花の墓らしい墓は、すでに上の方の角が朽ち果て、傾いている。

「ねえ、これ読める」

知恵が伊知郎に尋ねる。伊知郎は古代史の専攻なのでくずし字は幾らか読めた。

「貴か大か、平……？ その横は、木と花かな。後は欠けていて判別したいが」

「だったら、きつとそうよ」

「過去帳には天保の年号だったし……」

「もしもよ、この墓が貴平と木花の墓なら、この辺りに、出てもおかしくないわよね」

知恵は、半分確信するように伊知郎の顔を見た。

「そうだね。他にそれらしい墓はなかったし、そういうことにするか」

伊知郎は、確信の無いまま、知恵の直感を優先した。極楽坂の墓地は、すでに昔の面影はなく、墓石はしつかり立っているものは少なく、傾いたり、割れたり、粉々に割れている墓もあった。墓石に刻まれている文字も読めないものも多く、解説できなくなっている。生国が分らない者は、ただ単に骨を甕の中に入れ、その上に石を載せた墓も少なくなかった。

夜、昼間の極楽坂の墓地とは、雰囲気異なりうら寂しさを感じる知恵と伊知郎であった。

暗闇の中に、灰色に浮かぶ墓は、幽霊や亡霊が立っているように見える。崖の下の岩場に打ち寄せる波の音が、死んだ人の囁きにも聞き取れた。

知恵と伊知郎は、寄り添うように立つ二本の黒松の横の墓が見える道の裾に、腰を下ろした。

伊知郎は足元を照らしていた懐中電灯の光りを、おもむろに消した。

二人が座った後ろには、夏草が背丈以上に茂り、被さるようあたりを暗闇にしていた。闇に包まれた二人には、もう虫の鳴き声しか聞こえてこない。その音の合間を抜けるように岩場に弾ける波の音が僅かに聞こえて来る。墓地の向こうに見える水平線は微かに海と空を分けていた。

月は三日月。蒼白く冴えわたり、あたりをぼやっと照らしている。ゆっくりと流れる雲に月は隠れ、漆黒ほどでもないが闇夜になるのであった。

「静かね。……今夜は無理かな」

「今週いっぱいに出てくれるといいね」

伊知郎の眼が時計の文字盤に、短針が午前一時と二時の間に止まっているように見える。またガサガサ、と聞こえる。風による音か、何かが動く音か？ 分らない。

「何か動いた？……寒くなつて来たわ」

と知恵は伊知郎に軀を寄せて来た。雲に隠れていた月が顔を出した時、知恵のか細い軀に武者震いが走った。その時、伊知郎は屈み込んでゐる知恵の肩をそと叩いた。伊知郎は、無言で右手を二本松の所に指さした。知恵の眼が伊知郎の指先に……。

「あああ！」

と声を挙げそうになつた。が、両手で口を押え、知恵の眼が飛びでそうになる。

知恵と伊知郎は我を忘れて、暗闇に浮かぶ二つの白い影に眼を奪われた。

その輪郭は男と女。

男ががっしりとした軀に、しっかりと角帯を締めた昔の船乗りのモジリ姿、髪は後ろできりつと結んでゐる。女はやや細めの軀に着流しの着物姿、帯は腰辺りに前締め。時折、海から吹き上げの風に長い髪が小さく揺れる。

淡い月の光りが二人を柔かく包み込む。

二人の背中が青白く光る。寄り添う男女は、仄かに光る三日月を眺めているではないか。

断崖の向こうに見える海原は、漆黒の色が増し、虫の声は、知恵と伊知郎の耳には、入ってこなかった。

知恵は、幻想的に見える光景を、怖さを忘れ、うっとり眺めた。知恵の右手は、伊知郎の左の膝頭をきつく握る。次第に握る手は汗ばんで来た。伊知郎は左手を知恵の肩に回し、知恵の軀を抱き込む。知恵と伊知郎の姿は、極楽坂の闇の中に溶け込んでいく。

女の亡霊は、男の亡霊の腕にすがり、男は優しく女の腰辺りを抱き込んでゐる。その二人の足元には夏草が生い茂り、立っているのか浮かんではゐるのか、知恵と伊知郎にはわからなかった。

そのうち、月の周りに雲が忍んで来る。あたりは、少しずつ暗さが増して来た。

その亡霊の二体は、月が雲に隠れる前に、少し振り返り、暗闇の中に吸い込まれていった。再度、雲間から月が現れた時には、二人の姿がなかった。ただ、夏草が潮風に揺れているだけだった。その時、小さく何かが鳴いた。

月が雲間に隠れて行くと、知恵も伊知郎も、闇の底に落ちて行き、いつの間にか眠り込んでいた。知恵は伊知郎の膝の上に頭を置き、伊知郎は知恵を抱え込むように眠り夢の中にいた。いつ頃眠つたのか、定かにわからなかった。

知恵と伊知郎が、朝露に起され目覚めた時、知恵の両親が探しに来ていた。

「よかった。生きていて。幽霊にさらわれたのかと、思ったわ」
知恵の母親が、安堵の表情を浮かべた。

「そんな筈を被つて、こんなところで、よう、夜明ししたな」
と父親があきれ顔をする。

知恵と伊知郎は、朝露に濡れた筈をまじまじと見た。
「嘘でしょう……」

と知恵は、次の言葉が出てこない。
「……ぼくたち、筈を持って来ていないし、被つてもいない……？」

伊知郎と知恵が、互いの顔を見合い、え！ と声飛び出した。
「あんたら、何を言っているの？ 筈、ムジナでもかけてくれたのと言うの、ねえ？」

知恵の母親は、父親に同意を求める。

知恵の父親は、あきれ顔で筵を手にとつて、品定めをした。すると、新しい筵ではないことが知恵の父親にもわかつた。筵が朝露に濡れ、湿り気を帯びていた。わずかに潮の匂いがする。

知恵と伊知郎も、筵に鼻を近づけてみた。すると潮の匂いに、動物の匂いがかすかに混ざり合つていた。

それはなんだか、どこかうら寂しさが匂うものだった。その記憶は、昨夜、二つの亡霊が出て来た時に感じた匂いと、同じように思える二人であつた。

「知恵、亡霊が出て来た時、この匂いを感じなかつたか？」

「わたしも、今、そう思つたの、時々、女の亡霊の髪が揺れる時に、そんな匂いが流れてきたような気がする」

「ところで、二人は幽霊か、亡霊を見ることができたの？」

知恵の母親が、真顔になつて知恵と伊知郎の顔を見比べて訊くのである。

「見た。見たよね」

と、知恵は伊知郎に同意を求めるように、やや不安顔で父と母に言うのであつた。

「話は家に歸つて聞こう。取りあえず歸るぞ」

知恵の父親の言葉で、知恵と伊知郎は二本の黒松方向に手を合わせ、極楽坂を後にした。

筵は六地藏の後ろにそつと置いて来た。

極楽坂の墓地は、夏の朝日を浴びて清々しく、透き通るような風が流れていた。日本海は、今日も凪らしく漁に出る小舟が船外機の音をたてながら、水面を滑走している。

昨夜、貴平と木花の亡霊は、最初知恵と伊知郎に気が付かなかつた。久しぶりに夏の夜に月見に出て来た貴平と木花は、深閑とした松林の中、波静かな海の先に続く松前の地に想いを馳せていたのであつた。

その傍らに二匹の小さな何かが、ちよこんと座つていた。

そんな時、墓地の道脇に人の気配を感じた貴平と木花は、振り向くと、怖がるのではないかと思ひ、知恵と伊知郎が、気が付かないように二人を眠りの闇の中に閉じ込めたのである。知恵と伊知郎が、深い眠りに落ち、自分たちの存在が夢の中の出来事として思うように、暗示をかけた。そして貴平と木花は、二人が夜露に濡れないように、六地藏の後ろに置いてあつた筵を、そつと被せてあげたのである。

貴平と木花は、暫く、知恵と伊知郎を眺めていたが、自分たちの住処へと歸つて行つたのであつた。

知恵と伊知郎が家の玄関に入ると、味噌汁の香りが二人を迎えてくれた。知恵の祖母が、にこにこ笑いかけ、

「貴平と木花を見ることができたんやね」

と言ひ、朝ごはんを食べまし、と促してくれた。

祖母が作つてくれた味噌汁には、一昨日、知恵と伊知郎が田之尻の浜で採つて来た海ソウメンとマツバガイに細ねぎを散らしたものだつた。その香りと温かさが、冷え切つた二人の軀を温めてくれた。

朝食をすませた知恵と伊知郎は、縁側の籐椅子に座り、しばらく泉水に泳ぐ鯉を見つめながら、昨夜のことを思い起こしていた。

そこへ祖母が、緑茶を入れて持つて来てくれた。

「貴平と木花は、どんなふうだつた？」

祖母は、籐椅子に座る知恵と伊知郎に話しかけた。

知恵と伊知郎は、祖母の前に座り直し、知恵が昨夜、見たことを、二人が極楽坂の墓地の道端の裾に座つたところから話し始めた。

知恵が話す。それを補うように伊知郎が付け足す。祖母は、

時々、頷きながら黙って聞く。時折、泉水の裏山から吹き下ろす乾いた風が、風鈴の下げ紙を揺らし、涼やかな音色を残していく。木漏れ日が、ばらばらと泉水に光る。すると、何に驚いたのか鯉が飛び跳ねる。水面に波紋の輪が広がる。そんな泉水に祖母の視線が注がれた。

聞き終わった祖母の顔に、小さな笑窪が浮かび、ありがとう、と言、小さな唇からもれ出る。

「婆ちゃん、でもね。亡霊か幽霊かわからないけど、確かに見た。でも夢だったかもしれないかも……」

知恵は自分が亡霊を見たという確信を、今ひとつ持てなかったのも事実であった。

それは伊知郎にしても同じであった。

すると祖母は、二人の話に納得したように言う。

「いいんだよ。直に幽霊や亡霊を見たら、だれだつて腰を抜かすだろうよ。それにびっくりして声が出なくなるもんさ。夢の中で見るほうが怖くないよ。それでもびっくりして起きるがね」

「もしかして、婆ちゃんも見ることがあるの？」

「さあ、どうだったか。昔のことだから忘れたわ」

祖母は湯呑を持って、ゆっくりと茶の間に帰って行った。祖母は独り言のように、まだ未練があるのかな、と呟く。

「知恵、おばあちゃんも見ることがあったらどうね。」

知恵は、そうね、と頷いた。

「知恵、貴平と木花は、すでに、成仏していて、懐かしさのあまりに出て来るんじゃないかな。二人にとつて福良は、出会いの場であり、忘れられないところだったんだよ。そんな二人のために、お花と御線香を挙げに行かないか。今日は、ちょうど送り盆

だろう」

知恵はそうだねと頷き、立ち上がった。

「お母さん、お花、まだある。線香もまだあったよね」

貴平と木花が極楽坂の墓地で、二人一緒に過ごさようになってから、この世に生きていた以上の年数が経っている。その年数は、貴平と木花の仕合せを永遠に約束してくれる時間ではないか。

万葉人は、愛し合う者同士心が、魂となり、躰を抜け出し飛翔し、重なると言う。

貴平と木花の肉体は、滅んでしまったが、二人の魂は、滅ぶことなくこの世からあの世へと受け継がれて行ったのではないか、と思う知恵であった。

伊知郎もまた、愛し合う者たちの心の絆は、いつの世も人間のかけがえの無い命の営みに思えるのであった。

極楽坂は、いつか朽ち果てはするが、その地に眠る魂は、未来永劫生き続けるであろう。

・この話は、志賀町福浦港に古代から存在する極楽坂の墓地を題材にした架空の話である。

※参考資料 『客人の湊・福浦の歴史』

『福浦ものがたり』